

羽田亨総長の壮行式告辞

1943 (S18) 年11月20日

吉田英生 (S53 / 1978 卒)

本誌先月号の拙稿で、後藤敏雄名誉教授が要約されていた羽田亨総長の出陣学徒壮行式での言葉に関心をもちました。自力では見つけれなかったのですが、京都大学 大学文書館 西山伸教授（本稿文末の付記参照）から、京都大学 百年史編集委員会編『京都大学百年史 資料編2』2000年、466頁（https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/152912/1/material2_part2_chap5.pdf）に掲載されていることを教えていただきましたので、その全文を新たにルビもいくつか加えて紹介します。

京大史の中でも貴重な記録として、とりわけ総長にとって最も重苦しい思いで語ったに違いない言葉を広く知っていただければと思います。なお、現代的視点からは抵抗のある文脈や表現も多々ありますが、戦時中という極限的な諸制約の中での告辞であることを理解いただけるものと思います。（行間が広くなっているのはルビが正しく表示されるようにしたためです。）



<https://kensaku.kua1.archives.kyoto-u.ac.jp/shozou/?c=detail&sno=i600008389> より

大東亜戦争の開かれてより将に二年に垂んとする。緒戦以来皇軍の赫々たる戦果についてはここに改めてのべるを要しない。而して戦局の現階段は卒然として諸子の出陣を促して、一挙敵勢を撃破するの要を見るにいたつた。諸子は今や徴集の天命を畏み、勇躍軍伍に加はつて、敢然祖国のために戦はうとするのである。師弟としての情誼、国民としての感謝は、一言この華々しき諸子の門出を送るべき言葉なくしてやむ能はざるものがある。

親愛なるわが出陣学生諸子。諸子は本来學術をもつて国家に奉ずることを志し、孜々として勉めて今日にいたつたのである。修むるところは国家須要の学であり、養ふところは国民指導階級の識見徳性であつた。国家は実に諸子がこれをもつて君国につくし、その隆昌に寄与するところあらんことを期待したのである。豈はからんや、米英豺狼の飽くなき慾念と、増長せる暴慢とが、東亜の安定を紊し、

皇国の存立を脅かし、つひに宣戦の詔の発せらるるのやむなきにいたらしめ、今日諸子をして業半にして奮然軍に赴くにいたらしめようとは。さりながら国民皆兵はわが国是である。事なきに当つて文事に携はるものも一旦緩急あれば義勇公に奉じ、決然筆を投じて戎軒を事とするは、もとより国民当然の覚悟であり、今や実にその時に際会したのである。身をもつて君国の安護に任じ、雄々しくも剣とり佩^はき今ぞ立ちいづる諸子の勇姿を前にしては、嬉しくも頼もしくも、また有りがたくも感ずるのである。日ごろ積み来つた修養により、諸子の覚悟は夙^{はや}くすでに定まり、胸中おのづから成算あることはもとより信じて疑はないのであるが、それにしても、この際せめて一語をよせて固き覚悟の更にも固かれと祈ることは、余の当然の務めでありまた衷心よりの願ひでもある。

諸子、およそことに従ふものはその意義に徹することを

最も肝要とする。今諸子が学園より召されて軍に赴くのは、国家がこの際単に一般兵員の充足を企図するがためのみではなく、実にこの征戦の現情勢下において別に学徒なる諸子の出陣を要する特種の事情の存するものがあるによることを、ふかく諒得しなければならぬ。諸子は今や学すでに成るに近く、識すでに高く、加ふるに訓練の効をつんで体と神とともに旺盛であり、今の極めて緊迫せる戦局において皇軍の最も充足を要する諸種大小の幹部として、諸子を措いて他に適者をもとむべからざることが、その最も大なる理由である。さればこそ国家は諸子が成業の後において軍務に服することを今日にいたるまで認めて来たにかゝらず、今はその時をまつ能はずして、今次の措置にいづるのやむなきにいたつたのである。此のごとく、諸子の召されるのは、目下、一日も忽^{ゆるがせ}にすべからざる局面において、国家が諸子の上に重く寄託し、深く信倚^{しんい}するが故であつて、

平時に当つて、世の指導者として諸子の力に俟つところが、国民の総力をあげて軍国のことにつくすべき時局下におい

て、更に強く戦陣の裏にもとめらるるのに外ならぬのであ

る。この重大の時に当つて、かゝる重望を一身に負う諸子の荣誉や大なりといふべく、その責や又重しといはなければ

ばならぬ。諸子が今学徒出陣のこの意義に徹し、その荣誉

と責任とを自覚して、各自奉公の上に励むならば、諸子の

今日にいたるまでの心身の教養と鍛錬とは、おもふに見事

にその効果を發揮し、必ず国家の期待にそふを得るであら

う。敵米英にありては、いち早く多くの学徒を動員して軍

に従はしめてゐる事は、諸子の聞知するところである。あ

はれ名もなき戦に、ただ物力に自負して暴慢跳梁する驕児

の群に外ならぬ。崇高なる皇国の精神を体した諸子が、一

撃かれらの心胆をうばひ、その暴慢を挫き、その自負を失

はしめ、忠義に凝りしわが学徒の面目を發揮するであらう

事はわれらの諸子に対して切に祈念しかつ信じて疑はないところである。

刃かざして陣頭に立つからはもとより生死を超脱して、

必ず敵に勝つことを期せねばならぬ。さりながら、くれぐ

れも戒むべきは、血氣の勇に逸つて、無益にとりかへし難

い運命を招致してはならぬことである。君国のため、壮き

尊き命の今日ほど軽んずべき時はないとともに、また今日

ほど重んずべき時もない。敵たる軍規のもと、只管ひたすらに上長

の命を奉じて、知何なる難事にも敢然として当る間にも、

常に慎重と沈勇とを發揮して、举措進退きよそ度に当ることこそ

教養ある学徒の出陣に、ふかく望みをかけられる所以であ

る。真に国家興廢のわかるる重大時の今皇国の運命を自か

ら双肩になに荷へることをふかく覚悟して、進止いやしくも軽

挙盲動することを慎しむならば、おそらくは諸子の負へる

使命を達成する上において、過なきを得るであらう。

嗚呼、悠久の二千六百余年、今にして肇国ちやうこくの精神をさながらに發揮して、独り皇国の存立の為にばかりかは、広各「ママ」く八紘を以て字と為し、人類をして各々その処を得しめ、みた紊みだされたる世界の秩序を正しきに反さうとするのである。皇こうぼ謨真に正大、まことに人類の史上絶倫の聖業である。この一戦を外にして何を以てか米英積年の罪惡を膺懲ようちやうし、皇国の安泰をはかり、東亜の妖雲を排するを得ようか。而して諸子今や大命を畏み、勇躍してこの聖業に馳せ参ずるのである。諸子の一人は来りて余に告げて「げにもよき時に生れあはせたれ」とその感激を披瀝したのである、思ふにこの感激こそは必ず諸子の通有するところたるを疑はない。余をして再び諸子に対する嬉しさと頼もしさと有り難さとをくり返さしめよ。諸子の清く尊きこの心境の上にこそ皇国の永遠の隆昌と、世界新秩序建設の聖業は期し得られるのである。こゝに区々たる私情を去つて、喜び祝して諸子

の首途を送らねばならぬ。

さらば征き給へ、親愛なるわが出陣学生諸子。後にこの諸子の同学も、はやる心を押ししづめて、諸子と相携へて前線に立てる気構へのもとに、各々所要の学業を修め、やがて諸子の後につづくであらう。なほ要するならば、老も若きも、男も女も、およそ生を皇国に享けるもの、すべてが起つてさらに後につづかねばならぬ。一たび蹶然けっぜんとして立てる上からは、無道の敵にいやしくも屈服して、おめおめ辿るべき途の、わが国民の前には残されぬからである。白亜館裏城下のちかひを見るまでは、鞘に返らぬ剣である。さらば、顧みなくて雄々しく征き給へ。神かけて諸子の武運長久を禱るのである。

【付記】西山伸教授『羽田亨日記』と戦時下の京都帝国大学 https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/241006/1/kua_sosho_1.pdf では、羽田総長が贈ったとされる言葉に、以下のように疑問を呈しておられます。

この壮行式の際 羽田は「諸君、行き給え。しこうして帰り給え。大学は門を開いて諸君を待っている」という言葉を出陣学徒に贈ったという説がある。しかし、本日記の記述を見る限りでは、羽田がそのような言葉を贈ったとは考えにくい。